

浦賀文化

平成 24 年 (2012 年) 4 月 1 日

第 29 号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

引揚船入港

昭和二十年(一九四五年)八月十五日太平洋戦争終結後、ポツダム宣言により海外の軍人、軍属及び一般邦人は日本に送還されることとなった。こゝ、浦賀港は引揚指定港として、中部太平洋や南方諸地域、中国大陸などから五十六万余人を受け入れた。

浦賀港の引揚における特色はコレラである。当時の新聞では「海上にコレラ都市。食につまる復員者八万人」と伝え、そのピーク時には浦賀沖に二十数隻の引揚船がぎっしりと海上を埋め、十万人以上の帰還者が船内に閉じこめられていたとある。また、コレラが発生している船では、最低でも十四日間停泊隔離が必要で、その間に三回以上の検便を行い、異常がなくなつたことを確認してから、ようやく上陸が許可された。このことから、その間の船内の状況は想像を絶するものがある。その悲惨な記録を一人でも多くの方にと残された原稿などは、発行されぬままに保管されていた。その後、これらの原稿をもとにようやく作られた「浦賀港引揚船関連体験集」は、関わった人々の真情がにじみ出ており、戦争という悲しく残酷で愚かな行為や時代に翻弄されながらも自分の生き方を必死に見つめ、未来を信じて生きようとする

人々の姿がリアルに伝わってくるものとなっている。

当時の浦賀港は、敗戦国として在外各地から戻ってきた引揚者のための主要な指定上陸港の一つとなっていた。昭和二十四年度までに五十六万四千六百二十五人を受け入れ、引揚第一船となった氷川丸は昭和二十年十月七日に入港した。この船はミレー島旧委任統治領の南洋諸島より二千四百八十六人の軍人を満載していたが、このうち五百人が入院を要する疾病患者で浦賀棧橋から上陸した。その後も続々と船は入港し、帰還した引揚船では栄養失調やマラリアなどが多く死亡者が続出した。

もってアメリカ軍や厚生省は、コレラが日本に上陸するのを防ぐため「コレラ発生地または船内にコレラ患者のある船はすべて、浦賀検疫所にて検査を行うべし」との指令を出し、元海軍対潜学校跡(久里浜・長瀬)に移転拡充された検疫所で有史以来かつてないコレラ大防疫を実施した。

この後、浦賀港では多くのコレラ船が指定錨地に隔離され、また羅病した患者の収容もあまりの患者数の多さに不可能な事態となり、最終的には病院船VH002号を横浜から回航させコレラ患者の収容にあてる状態とまでなった。戦争によって海外からようやく故郷へ帰還した多くの人々が、コレラやあらゆる疾病などの困難に立ち向かい、そして痛ましい死を遂げたことを、私たちは決して忘れてはならない。戦争は何の罪もない人々を、そしてその家族の心まで直接、間接的に奪っていた。身内の迎えもなく、船内や病床で天に召された多くの人々の心の声や、無念さを私たちは感じとり、そして忘れることなく語り継いで行かなければならないのではないだろうか。

また、沢山の引揚者を収容

し、大きな役割を果たした浦賀港についても心にきざみたいものである。

半纏に 児を負いてゆく
おみなあり
このかなしきに
かへり来にけり

橋本 徳壽

この歌は、浦賀に帰還した作者が当時の心情を詠んだものである。このかなしきとは、読みとりかたはそれぞれであるが、敗戦を終えて帰ってきた人達の複雑な気持ち詰まっているようにも感じる。

(この歌碑は西叶神社境内



久里浜少年院内供養塔

右の写真は、コレラで命を落とされた方のために、昭和二十五年三月に久里浜少年院初代所長・田中繁太郎氏が

★参考資料

浦賀引揚船関連写真資料集

(発行…中島三郎助と遊ぶ会)

とつておきのはなし

(発行…神奈川県横須賀三浦地域
県政総合センター)



歴史 語りい座 ・ 浦賀 二十九

郷土史家 山本 詔一



●ブラザース号来航●

会津藩が江戸湾警備をしてきた文政元(一八一八)年五月十三日、一隻の異国船が浦賀へ来航した。

郷土史家の大先輩である高橋恭一氏の「外国船来航史」などでは、会津藩が江戸湾警備を始めた文化八(一八一一年)と十二(一八一五年)年に、イギリス船が浦賀近辺に来航したと記されているが、会津藩の記録にも浦賀の記録にもそれらしき事柄が出てこないの、いまのところ江戸幕府が鎖国制度を敷いてから江戸湾へ来航した最初の異国船であった。

会津藩は直ちに三浦半島の各村々に通達を出し、動員をかけた。陣屋の武士たちは燈明堂上の平根山台場に詰め、集結してきた領内の船は異国船を二重、三重に取り囲み、ものものしい警戒ぶりであった。

この異国船はイギリス船のブラザース号といい、ゴールドン船長以下乗組員九名の商船であった。ブラザース号の大きさは長さ十八メートル、幅四メートル、深さ三メートルほどで「日本の船にすれば五、六百石船ぐらい」の小さな船

であった。船体は黒塗りで中程に一筋の白い線があり、波があたるところより下は銅板が張ってあった。

当時の日本人が注目したのは二本の帆柱であった。奉行所の役人が残した記録には「港へ入る時などは丈を縮めることができ、日本の釣りざおのようになっており、また帆柱の上には二人ほど上がれるようになっていて、」など細かに観察をしている。

浦賀奉行所では、与力・同心を乗せた番船を出し事情聴取をしたが、片言のオランダ語しか使えない役人にはまったく通ぜず大いに困惑していた。幕府は天文方にいた馬場佐十郎らを浦賀へ派遣して対応にあたった。

馬場らの聞き取りから、ブラザース号はインドのベンガルからロシアへ商売に行く途中であり、日本でも商売をするために立ち寄ったことが判明した。船には海賊から身を守るために大筒二門、鉄砲二丁、ピストル二丁の武器を持っており、奉行所で出帆するまで預かることにした。

ものものしい日本側の警戒ぶりとは違いフレンドリーな態度のゴールドン船長はある程度まで船中を開放したとみられ

る。神奈川湊の商人・浦賀屋六右衛門の話をまとめた滝沢馬琴の「夷園小説拾遺」によれば、「船中は三、四層の構造になっており、ガラス製の行燈(ランプ)があり、その明るさに驚いて、船中はこれ一つあれば十分である」と感心している。さらに「異人の顔は白く、眼は浅黄色で、毛髪、ひげ、まゆ毛まで赤く、ザン切頭であり、鼻すじがとおっている」と身体の違いを述べている。

さらに着衣に関して「みな紺の筒袖の羅紗を着ており、なかでも船長と思われる人の服には総模様になっている」と身分によって服装に差があることまで指摘するほどの観察ぶりであった。

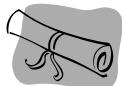
ブラザース号の滞在は一週間ほどであったが、鎖国以来二百年近く外国人やその文化に直接触れることのなかった浦賀周辺の人々にとっては、何もかもが物珍しいことであり、このチャンスに逃すまいとさまざまな物に興味を示し、船を訪れては異国の文化に触れることを楽しんでいたように思える。またそれが出来な人も海岸から遠眼鏡で、様子を窺っていた。

~~~~~ 第21回【特別展示会】開催される ~~~~~

2月11日から2月19日まで、浦賀コミュニティセンター分館にて、特別展示会「浦賀の廻船問屋の生活 ～萬屋清左衛門家～」が開催されました。

また2月11日には浦賀コミュニティセンター集会室で、廻船問屋・萬屋清左衛門家の直系子孫の宮井新一さんをお招きして、「浦賀の廻船問屋 ～萬屋清左衛門家～」をテーマに基調講演が行われました。

展示会では廻船問屋に関する多数の資料や生活文化財が展示され、基調講演では廻船問屋について、興味深い話を聞くことが出来ました。



基調講演の様子

多くの方にご来館いただき、特別展は大盛況のうちに終わりました。皆様のご来館に感謝いたします。

今後も皆様のご希望にかなう企画を計画していきたいと考えております。ご支援よろしくお願いたします。

笑話一題

昨年のですが、今度は何を作ろうかと家庭菜園の苗を考えながら歩いていたら近所の花屋さんで「ピーマン」と書かれた苗を見かけました。さっそく八苗買いました。いつもながら根付くかどうか心配でしたがすぐに葉が殖えそのうち小さな白い可憐な花が咲き安心。

おかしなところ「ピーマン」とトウガラシの見分け方という項目がある位よく似ているとのこと。それもそのはず、ピーマンとはトウガラシの甘味種を言うのだそうです。花屋さんも一つ二つ紛れていればすぐ判るのでしようが、全部違っているとそれが間違いだと思付かない。これが心理の盲点か、人間の知識というものの儚さを感じました。という訳で去年は唐辛子が豊作でした。(生・半可通)